

晩秋の大谷祖廟から銀月アパルトまで

浅山泰美エッセイ集『京都 銀月アパルトの桜』に寄せて

浅山泰美さんは、詩誌「コールサック」(石炭袋)に一九九一年から休むことなく、二十年近く詩篇を寄稿してくれている。また二〇〇二年からは詩の他にエッセイも同時に寄せてくれている。その八年あまり書き続けてきたエッセイをまとめたものが今回の『京都 銀月アパルトの桜』である。「コールサック」は一九八七年に創刊されたのだが、現在でも寄稿してくれる詩人で最も古い詩人は浅山さんになってしまった。しかも年に三回だが一度も休まれたことはない。浅山さんの精神の在り方を示しているのは、この持続的な創作行為を思い起こせば明らかになる。

浅山さんは、桓武天皇をまつる平安神宮の北にある錦林小学校に通い、今もその左京区に暮らしている。詩人には自分の生きてきた場所を隠してその場所から自由に飛躍してしまう詩人も多いが、浅山さんはそういうタイプの詩人ではない。自分を育んできた左京区の人びとや暮らし、景観、歴史、文化などの身体に刻印された記憶を大切に、詩を書いてきた。と同時に浅山さんはその記憶をエッセイでも記して、二〇〇〇年には幼少時代の伏見区のことも含めたエッセイ集

『木精の書翰』を出した。私はそのエッセイ集を読み、浅山さんに引き続き京都のことをエッセイに書いてもらいたいと願い、「コールサック」に依頼し続けてきた。浅山さんの原稿はいつでも早めに詩とエッセイが同時に届くのだ。溢れるような作品のモチーフがあるのだろう。書かざるを得ない何かが突き動かしているのだと感じられた。

二〇〇六年に詩誌「コールサック」を本格的な出版社として(株)コールサック社にして三年目の二〇〇九年の新年初めに、「詩人のエッセイ」というシリーズを企画した。中国・関西方面に打合せに行く用事があり、浅山さんと連絡を取り、京都で会い「詩人のエッセイ」シリーズとして浅山さんの京都のエッセイを刊行したいことを提案した。浅山さんはすぐに快諾してくれた。私は浅山さんの詩やエッセイの中にある京都人の暮らしの手触り感を伝えるエッセイ集にしたかった。そのことを明確にしておくには、あつどのようなエッセイが必要かを打合せし、内容が膨らんでいく思いがした。浅山さんと打合せをした際に、まだ書かれていないが「銀月アパルトの桜」というまだ見ぬ作品があることを話してくれた。私はその作品がタイトルとして相応しいと考えて、それを中心とした編集を目指していった。浅山さんは書き残した作品を次々に書き、またエッセイの前に入りたいと考えた短歌も書き上げて今回の内容にまとまっていたのだ。

二〇〇九年十一月二十九日に京都の詩人名古きよえ氏と神戸と言われた。両親は浄土真宗の熱心な信者だったそうだが、そのことも関係してか無神論者の浜田さんは、笑顔で自分が死んだら大谷祖廟に骨を納めるように家族には話していると言っていた。二十年近い交流の中でその話を何度も聞いたものだった。実際に二〇〇八年の晩秋には奥様と二人のお子様の手でお骨は大谷祖廟に納められたのだった。宗教宗派を問わず、たとえ無神論者であっても来るもののお骨を受け入れて、わずかなお金で永代供養をする大谷祖廟の在り様に、いつも一人の民衆の立場になって詩を書き、詩運動を实践された浜田さんは共感を抱いていたのだ。そんな浜田さんを偲ぶために私は今年の春にお参りをし、今回は二回目だった。浜田さんには『大空襲三一〇人詩集』と『大崎二郎全詩集』の報告をした。浜田さんは、広島・長崎の平和の哲学に基づいて核兵器を廃絶するために被爆者ではない詩人こそが原爆詩を書くべきだという原爆詩運動の提唱者だった。私とは、原爆を廃棄するだけではだめで、無差別殺戮に通ずる空襲空爆を確信的に実行する戦略爆撃をなくさなければと話していた。その意味で『原爆詩一八一人集』と『大空襲三一〇人詩集』は、編者の一人である長津功三良さんと共に浜田さんが発案者の一人だった。そして浜田さんの盟友の高知の大崎二郎さんの全詩集も校了になり、もう少して刊行されることを報告したのだった。

東大路通りの祇園のバス停で降り、八坂神社を抜けて円山

戸の詩人の永井ますみ氏が中心になって呼びかけた「大空襲詩と生活語の朗読会」があった。二〇〇九年三月にコールサック社が刊行した『大空襲三一〇人詩集』に参加した名古さんは、「戦争中に疎開先で空襲に遭い、先生を亡くした児童の経験」を詩に書いて参加された。また七月に東京で開いた出版記念会にも上京してスピーチもしてくれた。そんな名古さんが河原町通丸太町の町家風料亭で小さな朗読会を開いたのだった。マイクを使わずに肉声の届く畳の部屋で三十人ほどが集まり、私と浅山さんも参加した。浅山さんは本書に出てるライアーを弾きながら京言葉の詩を朗読してくれた。心臓の形ともいわれる小さな豎琴であるライアーという楽器は、人の心の温かさを人に伝えるために造られたと語られている。浅山さんは京都のこの場所からライアーの音色に乗せて詩を朗読するスタイルを創造し切り拓いているのだ。

翌日に最終原稿や装丁の打合せや、そのエッセイにも出てくる左京区の銀月アパルトを見学するために、近くの上終公園で待ち合わせをした。早朝、駅前のホテルを出て駅のコインロッカーに荷物を預けた後に、私は東本願寺の大谷祖廟に向った。浄土真宗の親鸞を祖とする大谷祖廟には、二〇〇八年五月に亡くなった浜田知章さんのお骨が納められている。浜田さんの自宅にはよく遊びに行つたが、浜田さんの書齋には仏壇があり、その中には両親の名前が記されただけの位牌があった。浜田さんの両親のお骨も大谷祖廟に納められてい

公園に入るとまだ七時半すぎだったせいか、いたるところから水の音や鳥の声が聴こえてきた。どこから聴こえてくるのか分からないが、確かに噴水や噴水に注がれる引き水の水音以外にも、疎水の流れや眼に見えない地下水の流れがあるように思われるのだった。円山公園は平安神宮と並んで枝垂桜の名所として名高いが、晩秋の早朝の池の周りの楓や水音がこころを澄ませてくれるような気がした。円山公園の由来の碑には、慈円僧正が関わっていて「わが恋は松を時雨の染めかねて 真葛ヶ原に風さわぐなり」という短歌が記されていた。またこの公園には坂本竜馬と中岡慎太郎の銅像もあり、きつと高知に関わりの深い浜田さんはこの銅像のある場所も気に入っていたのだろう。円山公園の先に大谷祖廟がある。大谷祖廟の境内には広く長い参道があり、山門付近に「一本の草さえ 生きねばならぬ 使命をもっている(藤原鉄乗)」という書が記されている。私はこの言葉にも惹かれていて、読むことを楽しみにしていたのだった。また祖廟に行く寺院の手前の碑に「口あいて落花ながむる子は佛」という俳句も素晴らしい精神を刻んでいると感じ入っている。石段を上がり祖廟の前に佇むと、一人も参拝者がいないので、ゆっくりと浜田さんに多くのことを報告し、語りうることができた。

京都に来た大きな目的を終えて、次は浅山さんとの待ち合せ場所に行くのだが、普通ならばバスかタクシーを利用するの

天皇が東京に去った後に、京都の人びとは創意工夫をして経済や文化を守ってきたことが分かる。その発案者は下京区の吉本源之助といわれ京都府の北垣国道知事が決断をしたという。蹴上発電所で発電された電気は、日本で初めての路面電車開業や家庭の電灯にも使用されたという。琵琶湖疎水は今も哲学の道の疎水などにも使われているのだ。そんなことが記されてある碑を見ながら南禅寺に向った。鹿ヶ谷通り沿いの南禅寺は外の紅葉の林だけ眺めて、若王子神社から始まる哲学の道に辿り着いた。

哲学の道を歩いた記憶は、中学生の修学旅行の時だった。きつと銀閣寺に行く際に少し歩いただけだったと記憶している。当時はなぜ哲学の道と名付けられたかなどは知りもしなかった。しかし大学の哲学科に入り本格的に哲学書を読むようになり、多くの思想・哲学者の本も目を通したが、中でも最も魅力的な思索する文体の持ち主の一人は、西田幾多郎だった。今も行き詰った時には西田幾多郎の『善の研究』などを時に愛読している。一九一〇年に学習院大学から京大に招かれて一九二八年に退官するまで西田幾多郎は、この疎水の散歩道を思索しながら歩いたという。西田幾多郎によつて京都学派と言われるほど、若き俊英たちが西田の下に集つてきた。教え子の中でも三木清、戸坂潤、務台理作、高坂正顕、唐木順三、西谷啓治、下村寅太郎などの本も私は愛読してきたが、師と同じに独自性のある魅力的な文体なのだ。西田幾

が常識的だ。しかし地図を見ているとこの場所から神宮通りを歩き、知恩院、青蓮院を脇に見て、三条通りを右折し、蹴上浄水場を左折し、インクラインを抜けて南禅寺近くの哲学の道まで行こうと思った。そして哲学の道を歩きとおし、終点である白川通りに入り、その白川通りをしばらく歩けば目的の地の上終公園に辿り着くはずだった。まだ朝の八時なので待ち合わせ時間があと三時間あるのでゆっくり歩いても十分可能な距離だった。

知恩院や青蓮院は外から眺めるだけでも、紅葉が美しい絵葉書のような境内だったが、あまりに絢爛豪華すぎる気がして入ることをためらった。しかし早朝から京都の人びとが道路の落ち葉を掃いている姿が、とても自然で清々しく美しかった。京都の美は、京都の人びとの心にある美意識が生み出しているのだと感じながら歩いていた。その先を右折し三条通り沿いの白川小学校に入ってみた。ちょうど朝礼をしていて校長先生が話をしているのが聞こえた。校門先には、「人によさしく 物によさしく」という標語が掲げられてあった。白川小学校の先には蹴上浄水場あり、ここが琵琶湖から水を引いて市内に疎水を流している起点になっている場所だという。私には耳を澄ますとどこから水音が聴こえる気がしていたが、この場所が原点だと思うと親しみを感じた。この琵琶湖疏水で水力発電が日本で最初に行われた。またインクライン(傾斜鉄道)も導入されて台車で船を引き上げたという。

多郎は教え子の潜在能力を引き出す真の意味で教師だったのだろう。後の京都の学生たちは、ドイツのハイデルベルグ大学近くのゲートやニーチェも歩いたという「哲学の道」になぞらえて、いつしか「哲学の道」と言い始めたらしい。

若王子神社から銀閣寺までの約二kmの石畳を踏み、流れる水音や鳥の声を聴き、楓などの紅葉や山茶花の花ばなや、道ゆく人びとのリラックサして歩く表情を眺めながら歩いた。京都の川は北から南に流れているのだが、疎水は不思議なことに逆に南から北へと流れているのだ。途中に法然院があり、疎水辺りに西田幾多郎が歌った短歌が刻まれてあった。南禅寺には、『いきの構造』を書いた九鬼周造や谷崎潤一郎、河上肇などが眠っていて心惹かれたが、先を急いだ。その時に私は浜田知章さんの語った話を想起した。浜田さんの学んだ石川県河北郡宇ノ気小学校の先輩には西田幾多郎がいて、悪さをすると、西田幾多郎の写真のある部屋で立たされて、西田先生に恥ずかしくないのかというお説教をされたという。浜田さんは郷土の偉大な哲学者として西田幾多郎を尊敬していた。私には浜田さんがなぜこの大谷祖廟に両親のお骨を納め、自分のお骨もそうにしたのか、なぜか了解できた気がした。

ようやく銀閣寺前までできたので、銀閣寺に寄つてみた。山門前に敷かれた黒い磨き石には打水されていて黒光りしていた。銀閣寺は工事中で職人たちが修理に勤しんでいた。石庭

も砂の形を整えている最中だった。私は美しいものを守っている人びとを見ることができて良かったと感じた。銀閣寺の裏山に登りながら水の音がいたるところから聞こえた。やはり京都は水の都なのだと思えてきた。修理中の銀閣寺は紅葉の中で再起を期しているようだった。

銀閣寺を出て哲学の道に戻り白川通りを目指した。白川通りに着くと右折し、しばらく歩いて左に入ると上終公園があった。京都では上は北のことを指しているから、北の終わりのことで、浅山さんによるとこの辺りで人の住まいが終わりだったから名付けられたそうだ。公園には若い母親たちが子供たちを遊ばせていた。しばらくすると浅山さんが自転車に乗ってやってきた。その自転車を引きながら銀月アパートに向った。浅山さんは日頃見慣れているにもかかわらず、家々の庭を眺めながら紅葉の美しさに感嘆の声をあげていた。多くの住まいが庭木の紅葉を大事にしているのが分かった。それは円山公園、知恩院、南禅寺、青蓮寺、銀閣寺などには量では負けるかもしれないが、質では負けてはいなかった。住まいに紅葉の美を抱え込んでいるのが京都の家々の在り様なのだと私は感じた。そう考えるなら、桜においても同じことが言えるかもしれない。きつと紅葉ほどではないかも知れないが、桜の樹木も大切にされていて春になると家々の庭から独特の花の美を放っているのだと想像させられたのだ。五分も経たないうちに銀月アパートが見えてきた。大正の終わ

り頃にも入ることができず暮らしに生かされていない場所になっていることが残念だった。私には銀月アパートが今も息づいていて暮らしの中で生かされていることが感動的だった。京都の人びとが千年の建物を愛すると同時に九十年前の住まいも大切に、共に生きようとしている心意気や美意識を感じ取った。浅山さんのエッセイ集にはそんな左京区の人びとの普段着の素顔や美を大切に暮らしが描かれている。それを多くの人びとにも読んで欲しいと願っている。

谷崎潤一郎の名作『細雪』に出てくる祇園の夜桜、円山公園、平安神宮、南禅寺、嵐山などの桜はきつと見事なのだろう。しかしそれよりも私は、今度の春に訪れて浅山さんが触れていた松ヶ崎浄水場の疎水の桜並木、終神社の桜の巨木、修学院の桜並木、京都大学農学部の桜など、そして上終公園の桜、銀月アパートの枝垂桜を眼にしたいと思いつつながら、晩秋の左京区を後にした。

り頃に建築されたとのことなので、築九十年ほどになるという。緑の植木の壁で取り囲まれていて手前の庭には枝垂桜の巨木が玄関の左手に立ち、右手には柿の木が実を付けていた。玄関の三角屋根根にはまさしく銀月アパートと記されていた。アパートはコノ字型で小さな中庭もあった。そこにも小さな柿の木が一本植えられていた。角地に建っている所以他の側面には自転車と並んでいて、ここが生活空間だということが分かる。ステンドグラスの丸窓も、当時として洒落だったに違いない。このアパートを造った人物は、きつと銀閣寺の美意識を当時の暮らしの中に生かそうと考えたのではないかと浅山さんのエッセイの冒頭の「桜めぐり」で紹介されている。銀閣寺は「月の庭」と言われているという。世知辛い世の中で、居住者がゆつくり月見をすることができるように、銀色の月光がアパートに降り注ぐようにと願ってこう命名したと感じられた。このアパートの居住者はできるだけ音を立てないように静かに暮らすような了解がされているらしい。浅山さんが左京区の桜の中で、なぜこの銀月アパートの桜を愛しているのか、その銀月アパートの魅力が少し分かった気がした。

その後、浅山さんとは、銀月アパートと同じ頃に建てられて、以前NHKテレビの日曜美術館で紹介された、白川疎水脇のW・H・ヴォーリズの建てた駒井家住宅を見た。その瀟洒な建物も大きな庭も魅力的だった。しかし門が閉められて